

# 風土



## 寝につくやががんぼの生己が生

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

この頃の桂郎師は、風邪から肺炎をおこしたり、心筋梗塞症状で入院したり、体調は万全ではありません。なんとか恢復して七畳小屋での暮らしに戻り執筆活動を再開します。夜も更けて寝ようとする、**「ががんぼ」**が訪れて来ました。小屋の板壁に止まろうとしてぎこちなく長い脚を揺らしています。触ればすぐに脚がもげてしまう。このはかなげな**「ががんぼ」**に、病気がちの桂郎師は己の生を重ねてしまうのです。

## 蓑虫や師と決めしより師の遠く

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

桂郎師の俳句の師は石田波郷ですが、二年前に亡くなっています。この句の師は、作家でもある桂郎師が師事している永井龍男です。同じ東京の下町育ちで、通ずるものがありました。龍男の生き方の厳しさには畏敬の念をおぼえていました。それに比べて俺はという心情は、**「師の遠く」**と呟かざるを得ないのです。

## 己が身を離れて見ゆる秋の風

(句集『貴椿』より平成十年作)

器師はこの『貴椿』によって俳人協会賞を受賞しました。何よりも器師の言う「命二つ」の俳句理念がこの句集で定着しました。ここでの相手の命は「秋の風」です。なんとか「秋の風」に同化しようとするうちに、「吾の魂」が吾の身体を遊離したのです。その時はつきりと「秋の風」が見えました。器師にとって「秋の風」とは「死者の魂」を含んでいます、妻を失くして間もないころですので、「妻の魂」と交感しているのです。

## 妻の眼の中より出でて菊を焚く

(句集『貴椿』より平成十年作)

この句も「妻の魂」との交感を詠んだものです。「妻の眼」と言うのは仏壇の遺影とも読めますが、我が家のいたるところに「妻の眼」を感じるのです。つまり器師は常に「妻の魂」と一緒なのです。庭隅の枯れた菊でしょう。その菊を刈って焚いたのです。火にくべた赤や黄の色にまたその香りに、妻との昔日を想い起します。「妻の眼」から少し離れた庭で。

蓑  
と  
笠  
  
南  
う  
み  
を

清瀬にて  
二句

若葉風試歩の波郷とすれ違ふ

外気舎を覗く十葉踏みあらし

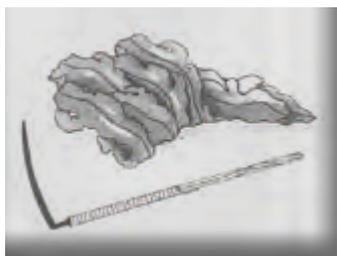
ゑんどうの鮫肌の莢愛すべし

ゑんどうを摘むやここよと揺れ呉るる

新じやがのひかりの玉を掘りおこす

父の日の堆肥の湯気にむせかへる  
蛭消え牛の匂へる闇もどる  
一本は月のあばたへ蜘蛛の糸  
負蜘蛛の繭の如くにころがれる  
原発の入江しづかに水母満つ  
堰越ゆる鮎やひかりの弧を描き  
青梅雨の那須野へ発たれ蓑と笠

悼 福田周草翁



# 竹間集

同人作品



蟬の木

土井三乙

太宰忌の夜の所在無きサンガラス  
雨あがるそろそろ草を刈る話  
夕涼し小路に暖簾出揃ひて  
豆腐食ふ間も風鈴のよく鳴れり  
夏木立影に入る人出づる人  
蟬の木を見上げてをれば妻寄り来  
大夕焼山々は地に伏すごとし

老鶯

高村令子

つばくらのや水のやうなる朝の空  
老鶯や仏も澄ます石の耳  
大棚田菜の花いつばい風いつばい  
ローカル車迫る万緑真つ二つ  
きれぎれに風くる植田見て飽かず  
思ひ出は浄化されゆく天の川  
ペン先に躓く一語蛍の夜

沖繩忌

林いづみ

安房路へとフェリーで渡る蛍狩  
青梅雨の机上に会計報告書  
夏燕千畳敷の夕映えて  
絆てふ不確かなもの沖繩忌  
夏雲や一湾みるみる淀むかに  
土ほぐす朝顔の苗蔓のぼし  
一週に一つと半のキャベツ減る

木下闇

小林共代

百余年歴史を踏みて木下闇  
日比谷見附跡の石垣緑さす  
音楽堂歴史を今に若葉風  
風五月首賭銀杏威を放つ  
石を抱く走り根奔放薄暑光  
青蔦や松本楼の灯の洩れし  
めまとひを払ひはらひて日比谷口

片 蔭

中根美保

片蔭に刈りしばかりの笹匂ふ  
廻廊に迷ひ込みたり道をしへ  
ひそと出て縁切寺の茗荷はも  
文字摺草あまたの中の白き花  
蜥蜴の子若草色の腹見せて  
キヤラメルの箱に空蟬をさまりぬ  
それぞれに好きな匙あるゼリーかな

信濃の空

間島あきら

群れ遠く一本天へ今年竹  
田の神の走り代田を波立てて  
一夜さに植田となりしうすみどり  
夏の朝まづ腰に吊る花鋏  
筆攔いて庭の若葉を浴びにけり  
枇杷熟るる海光に沿ふ故郷の町  
甘藍や信濃の空を呼び覚ます

ビーツ

柿沼盟子

物干しに蒲団三枚柿若葉  
梅雨深し酢漬けのビーツ瓶に詰め  
青梅雨の武蔵野をバスひた走り  
何となく寄る百貨店あすは夏至  
電話の声遠し雑踏の梅雨湿り  
土見えぬ四角き街の三夏かな  
浮きにくき水新しきプールかな

ひよどり坂

小林 共代

梅雨晴れや垣の直角城下町  
子規の句碑高崎川の涼しけれ  
橋詰の乙女の像やひかた吹く  
青しぐれ肩にたどりぬ武者古道  
今年竹ひよどり坂に日の斑  
青嵐や坂の半ばの車井戸  
胸突きのくらやみ坂や竹の秋  
梅花卯木馥郁として武家屋敷

麻暖簾棧の上がる老舗かな  
玄関の泰山木の花盛ん  
床の間の鎧一領みどりさす  
色寂し跡見花陰図青水無月  
名にし負ふ堀田藩邸風薫る  
揺り椅子二階に残り藤若葉  
老鶯や土墨を今に堀田邸  
四阿の裏側かげり瑠璃揚羽  
青葉騒悲話を伝ふる姥ヶ池  
小流れの音のかるやか杜若  
梅花藻へ人の集まるビオトープ  
城下町駅舎を抜ける青田風

# 山河集

同人作品



南うみを選

神杉のひとときは眩し夏祓

雨宮 桂子

梅雨晴や赤子は天を蹴るごとし  
涼風の早くも来る二時限目  
かたまれるうれしさ人も十葉も  
梅雨晴や洪水のごと象の尿

利根の風筑波の風や古風鈴  
ポスターのやや弛みたる薄暑かな  
振花の振れはじめの空の艶  
産土に一徹の黴ありにけり  
接点はなし草笛の女とは

山田 健太

三峰神社 二句

苗木三萬本奉納の碑や緑さす  
大神の阿吽を据うる青嶺かな

高橋まご子

清瀬結核療養所

十葉の香や外気舎は葩揚ぐ  
青蘆の波見てよりの胸さわぎ  
瀬の音や万緑水に迫り来る

岡本 尚子

蛸袋犬の高さにのぞき込む  
父の日や片方はづす子の補助輪  
大文字火床への道沢ほたる  
鳩の巣や昼も冷たき余呉の湖  
叩くなど書かれし西瓜叩き買ふ

松本 胡桃

青梅や家庭科のある男子校  
もてなしは星と地酒と夏炬かな  
ていねいに母の髪梳く柿若葉  
梅雨湿りダリもポア口も髭乱れ

# 風土独語／南 うみを



梅雨晴や洪水のごと象の尿

雨宮 桂子

まず、俳句の素材には限定はありません。作者は「象の尿」を素材にしました。大方は俳句にするのをためらいませんが、作者は「象の尿」まざと見つけたのです。滴のように音を立てて迸る「象の尿」を。まるで梅雨の間溜めていた尿が、一気に噴出したかのようです、おもわず「洪水のようだ」と声を挙げたのです。

ぐづる子にアンパンマンよ浮いてこい

岡本 尚子

「浮いて来い」は浮人形のことですが、呼びかけの言葉のような感覚があります。風呂などで浮かべて遊びますが、「アンパンマンの浮人形」がこの句の読みのポイントです。どの子供にも好まれるアンパンマンが風呂の中からひよいと飛び出しました。子供に笑顔が戻ってきたのは間違いないです。

産土に一徹の黴ありにけり

山田 健太

俳句は作者が描く場合と読み手に描かせる場合とがあります。この句は後者のほうです。「一徹」は一筋に思い込んで強情に押し通す性質のことです。読み手はこれでこの産土の小暗い処

の黒々とした黴を想像するのです。毎年のように現れる強情な黴は昔とちつとも変らないのです。

玉葱と農婦の頬と光りあふ

池田 光子

この「玉葱」は剥いた玉葱ではありません。「農婦」とありますから、畑の採れたての玉葱です。採れたての玉葱は皮も真っ白です。「農婦の頬」も収穫の喜びで輝いています。

大神の阿吽を据うる青嶺かな

高橋まき子

この句は埼玉県の秩父の標高千百メートルの高さにある三峰神社を詠んだものです。三峰神社は日本武尊が国生みの神を祀ったのが始まりです。武尊を導いたのが山犬（オオカミ）であったので狛犬ではなく大神が据えられています。その威容と万緑に囲まれた霊峰に驚いているのです。

梅雨湿りダリもポアロも髭乱れ

松本 胡桃

「ダリ」も「ポアロ」も髭が特徴の芸術家です。作者ははじめめとした梅雨の深さの中で、ふとこの二人の髭を想い起したので。この湿りようではびんと張った髭も台無しだと。

下闇に臨時派出所現るる

谷田明日香

「臨時派出所」は大勢の出入の催し物や祭に設けられます。この場合「下闇」から木立を想像します。神社の祭でしょう。小暗い所の「派出所」を「現るる」と置き、突如の感を出しました

# 風土集



## 南うみを選

ほうたるの闇濡れてゐる本能寺 水戸 池田 光子

父の日を忘れて父のいびきかな  
蟻の引く翅に乗りゆく蟻のゐて  
品書きの白玉ばかり見てゐる子  
まだ濡れてゐる空つぼのつばめの巢

三聖寺 榎原

相模原

佐藤やすこ

額の花色とりどりの恋みくじ  
五月雨や青籠りして奈良の古寺  
玉葱干すむかし牛舎の太き梁  
鍋 皿の石に干さるるキャンプ場  
ぐづる子にアンパンマンよ浮いてこい  
玉葱と農婦の頬と光りあふ

岩出

山田 健太

かたつむり迷ひ一つを持ちつづけ  
木杓子に沁みる汚れや半夏雨  
落し文通天橋より風立ちぬ

万葉譜

展げ置く「初春令月」風薫る  
参道をふさぐトラツク祭り前 舞鶴 山森みちよ

下闇に臨時派出所現るる

嬰兒のよろけて引き初めの御輿

黒南風に依代の竹ざわめきぬ

池に放る祭の果てのくず金魚

鳴りやまぬ隠岐の怒濤や梅雨の星 横浜

乾坤の氣息整へ男滝落つ 佐野つたえ

街の色奪ひて去りし白雨かな

パティシエてふ少女の夢やアマリリス

蚩袋まどろむやうに揺れてをり

剥き出しのジュラ紀の地層蚩飛ぶ 東京

短夜や地震速報鳴り響き 折田 京子

明易や水石齧のうすみどり